CARTOPIA 1972

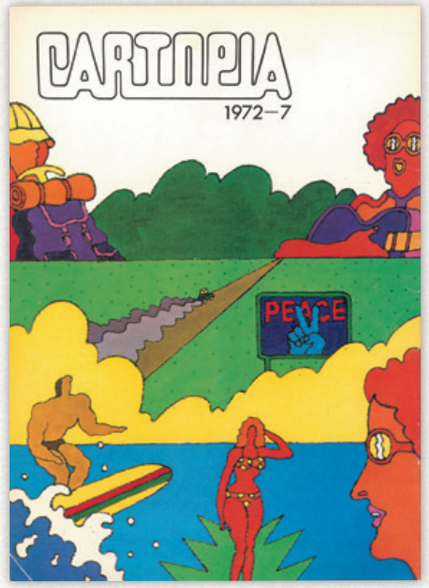
50年ぶりのカバーイラスト

林 恭三さん（イラストレーター）

1972年7月のカートピア創刊号から同年の12月号まで、雑誌の顔となる表紙を飾っていたのは林恭三さんによる個性的なイラストレーション作品でした。今回、創刊から50年目となる記念号の表紙を再び林さんにお願いして作品を描き下ろしていただくことにしました。50年前の表紙制作の思い出と、今も当時と変わらないイラストレーションに対する情熱をお話しいただきました。

はやし・きょうぞう　1939年愛知県名古屋市出身。名古屋市立工芸高校産業美術科卒業。雑誌、広告、ポスターなど多方面に活躍。日本ではいち早く立体造形を手掛けたクレイ・イラストレーションのパイオニアでもある。

今月号の表紙は、林さんが紙にペンで描いた線画に色指定で入稿しました。



創刊号（右）に続いて、1972年に発行された、林さんが描いたカバーイラスト。直線も曲線もすべてフリーハンドで描いたという緻密な線は、一度描いたものを和紙で写しとるという手法のため、独特の風合いを出しています。

ヒッピー文化が盛んだった頃（創刊号のカバーイラストを眺めながら）

「これは懐かしいですね。描いているのは当時の若者たちのカルチャーシーンです。登山やマリンスポーツ、そしてフォークやロックなどの音楽。ここに描かれているピースサインに象徴されるようなヒッピー文化が全盛の時代でした」

69年夏に伝説的な野外ロックフェス〝ウッドストック・フェスティバル〟がアメリカで開催されると、71年の夏には日本でも箱根・芦ノ湖でロックフェスティバルが開催されました。林さんも仲間たち5人で東京発のツアーバスに乗ってそのフェスに行ったそうです。創刊号のカバーストーリーで紹介されている林さんの写真もロングヘアーに水玉模様のシャツという当時若者たちに流行していたスタイルでした。（3P下）

表紙から感じられる編集スタッフの思い

「当時どういう経緯でカートピアのイラストレーションを依頼されたのかは思い出せないのですが、SUBARUと言えば小さなスバル360に大きな吉葉山（※1）が乗ってもスピードが出せたと話題になったことや、当時の日本車の中ではデザインがカッコ良かったことを覚えています」

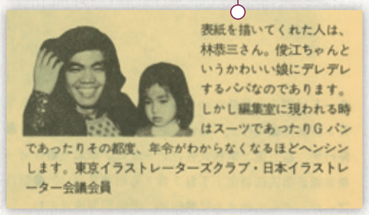
林さんは当時若者たちから支持を得ていた雑誌〝話の特集〟（※2）のカバーイラストやグラビアページを担当されていました。時代の最先端にいたイラストレーターである林さんにカバーイラストを依頼したことから、カートピアを通じて新しいクルマ文化をリードしていこうという当時の編集スタッフの熱い思いを感じとることができます。

独自の手法で描かれた味わい深い線

林さんが描いたカバーイラストの線には、ペン画にはない独特の質感があります。どんな手法で描いたのか聞いてみました。「墨汁を含ませた面相筆（めんそうふで）を使ってフリーハンドで画用紙に線を描き、そこに和紙を重ねて線を写しとる版画のような手法で描いていました。そうするとご覧いただいたように線に味が出るんです。吸い取った墨汁を良く乾かしてから、当時使い始めたばかりのアクリル絵具で彩色をしました。墨はにじむことなくくっきりと黒が残ります」林さんは、独特の風合いを出す和紙を手に入れるために、東京・日本橋にあった和紙専門の問屋、榛原（はいばら）に通っていたそう。平面のイラストレーションだけでなく、粘土を使った立体作品も手がける林さんは、様々な技法にトライして独自の作品を仕上げていたのです。

一日も休むことなく描き続ける

今回50周年記念特別号のために描いていただいたのは、50年前と同じく今の若者文化をテーマにした作品です。「ゲームやボルダリング、スケートボードなどを描きました。サーフィンだけは、70年代から変わらずに今も人気がありますね。今はタブレットPCがあるから、情報や資料画像もすぐに手に入るのでその点は便利になりました。80年代から作品の制作にもPCを使うようになりましたが、それでも最初に描く線は今でもフェルトペンで紙に描いています。その方が手垢が残るというか、味わいが生まれるからいいんです。絵描きは常に手を動かしていないとダメなんですよ。それは描くのが好きとかそういうことではなく、もう癖のようなものですね」林さんは今も毎日手を動かして創作活動を続けています。「何にも縛られず浮かんだイメージを自由に描いている」ということで、多い時には1日に72枚描いたこともあるそうです。そうやって今も現役で描く力を鍛えているからこそ、50年の時を経て描き下ろしていただいた今月号のカバーイラストレーションも、創刊号に負けない力のある作品になったのだと納得しました。



当時まだ幼かった娘の俊江さんと一緒に創刊号の目次ページ下で紹介されている林恭三さん。

※1：第43代横綱 吉葉山潤之輔

※2：1965年創刊 ジャーナリストの矢崎泰久が編集長、アートディレクターは和田誠が担当し、日本の雑誌文化に大きな影響を与えた。

Photographs●田丸瑞穂